

第4問

解説

問1 28 ③

プラトンは、永遠不変のアイデアの世界を想起してアイデアを恋い慕う魂の働きをエロースと呼んだ。もともとエロースとは、ギリシア語で“愛”“恋”を意味する一般名詞であったが、プラトンは完璧な存在への愛が最高のエロースであると捉えたのである。なお、①のプシュケーは魂、②のフロネーシスは思慮、④のピュシスは自然を意味するギリシア語である。

問2 29 ④

プラトンは、事物の本質は永遠に変化することのない**アイデア**であって、これは現象界とは別の**アイデア界**に存在し、**理性によってのみ把握される**と説いた。

問3 30 ①

プラトンは様々なアイデアの中で最高のアイデアである“**善のアイデア**”を太陽にたとえ、あらゆるアイデアに善という性質を与える究極のアイデア(=アイデアのアイデア)であるとした。

問4 31 ③

アリストテレスは、人間は**社会から切り離せない存在**であり、社会の中で初めて己の本性を完成することができるという意味で、「**人間はポリス的(社会的)動物である**」と述べた。

問5 32 ④

アリストテレスはポリス社会を成り立たせる重要な徳として正義を挙げ、これを全体的正義(ポリスの法を守ること)と部分的正義(公平であること)に分けた。さらに部分的正義は、市民の働きや能力に応じて地位や報酬を与える**配分的正義**と、利害・損得といった不平等を解消する調整的正義(矯正的正義)から成ると考えた。

問6 33 ①

アリストテレスは、事物の本質(=アイデア)が現実の事物から離れて存在するという師プラトンの考え方を批判し、**本質は個々の事物に内在すると捉えた**。そして、内在的に捉えられた事物の本質(Ⅱ)を、アイデアとは区別して**形相(エイドス)**と呼び、個々の事物は素材(Ⅰ)としての**質料(ヒュレー)**とエイドスから成ると説いた。よって、**あ**は素材である質料、**い**は事物に内在化された本質である形相、**う**は内在化していた形相が水や養分と結びつき現実化した実体が該当する。

問7 34 ①

■ステップ1

まず、それぞれの学派の「生活の信条」について考える。**ゼノン**を祖とする**ストア派**は、理性的な法則(ロゴス)が自然全体(世界)を貫いているのだから、人間もその本性である**理性(ロゴス)**に従って生きるべきであると説いた。このことを表す言葉が「**自然に従って生きよ**」である。

一方、**エピクロス**を祖とする**エピクロス派**は、現実の社会生活においては、心の平静をかき乱してしまう煩わしいことが多いため、政治や公共

悪人であれ善人であれ、罪を犯した者は罰せられるというのは、調整的正義に当たる。

◀ 理論と現実の紐付け

◀ 知識の理解

生活への参加を避けて生きること、すなわち「隠れて生きよ」を「生活の信条」とした。

■ステップ2

次に、それぞれの学派の「理想の境地」について考える。ストア派では、情念や欲望は理性を乱すものであるから、理性に従って生きるためには、この情念や欲望を抑えることが必要となる。そのためストア派は**禁欲主義**を唱えたのである。生徒Xの3回目の発言で説明されている「情念や欲望に惑わされ」ない心の在り方を、**アパテイア（不動心）**という。

一方、**エピクロス派**では、人生の目的である幸福は快楽であると考えた（**快楽主義**）。しかし、ここでいう快楽とは、生徒Xの2回目の発言にもあるように、「永続的な快楽、つまり不安や恐怖が取り除かれた状態」のことである。これを**アタラクシア**という。よって、正しい組合せは⑩である。

この問題の攻略ポイント！

同時代の思想については、個別に覚えるのではなく、問題で提示された表のようにまとめるとともに、それぞれを対比させ、併せて覚えるとよい。

問8 35 ⑩

まず、**ウ**に入るものを考える。生徒Xは、2回目の発言でエピクロス派について「不安や恐怖が取り除かれた状態」、3回目の発言でストア派について「不動心のこと」という表現を用いて説明している。この2つの発言を受けて、生徒Yは「**ウ**点では両者とも共通」と述べている。したがって、**この空欄には生徒Xの「不安や恐怖が取り除かれた状態」「不動心のこと」という発言に共通する心の在り方が入ると判断でき、これに該当するのはcである。**

次に、**エ**に入るものを考える。生徒Xは最後の発言で、2つの学派の違いについて、ストア派が「世界市民としての生き方を説いた」のに対し、エピクロス派は**エ**と説いている」と述べている。したがって、**空欄には「世界市民としての生き方」と対照的なものが入ると判断できる。**よって、世界市民主義と反対に、「政治から離れ」ることが記されている**e**が該当する。**d**は世界市民主義の立場に立った記述なので該当しない。**f**の公的な生活に積極的に参加すべきという考えは、「隠れて生きよ」というエピクロス派の信条とは異なるため該当しない。よって、正しい組合せは⑩である。

問9 36 ⑧

■ステップ1

メモでは、5で「したがって、死を恐怖や苦痛と捉えることは誤りである」という結論となっているので、まず、**結論に直結するキ**に**該当する記述を考える**。選択肢のうち、死の恐怖について述べている**e**と**f**が候補となる。**e**について、「死後の世界でも現世と同じような感覚を持ち続ける」ならば、メモの冒頭にある、現世での「恐怖を克服」することはできない。これに対し、**f**は「死んだ時には……恐怖もない」として「死を恐怖や苦痛と捉えることは誤り」という**結論に直結している**ので、**f**が

◀ 共通性・差異の分析

◀ 論理の組立て

該当する。

■ステップ2

次に、**カ**に該当するものを考える。ここでは、**キ**に該当する**f**につながる論理が入るため、死の捉え方を述べている**c**と**d**が候補となる。**c**の「アトムが移動する」は、現世も死後も「移動」ただけで同じ状態であるため、**e**の「死後の世界でも現世と同じ」という結論につながるように思われる。これに対し**d**の「アトムが離散する」は、**現世とは違う状態になる**と読み取れ、**f**と自然なつながりになる。したがって、**c**ではなく**d**が該当する。

■ステップ3

最後に、**オ**に該当するものを考える。ここでは、**カ**に該当する**d**につながる論理が入り、**a**と**b**が候補となる。**a**「アトムから構成されるものではない」は、恐怖という感覚はアトムに関係しないと読み取れるので、それ以降の原子論をもとにした死の恐怖の克服につながらない。これに対し、**b**は「感覚もアトムの組合せから生じる」としているので、**原子論をもとにした死の恐怖の克服という議論の前提**となり、適切である。よって、正しい組合せは④である。

この問題の攻略ポイント！

論理の組立てを考える際、最初から順を追って考えるのではなく、問題全体を見渡した上で、論理的に絞り込みの策を考えることも重要である。本問ではあらかじめ結論が示されているため、ステップ1にもあるように結論に直結する部分から遡って空欄に合致する記述を考えていくことが有効である。